２０２５年　９月　１日

退職教職員協議会双葉支部会員のみなさま

福島県退職教職員協議会
双葉支部　　事務局

退教協双葉支部「退教協ニュースNo.417号」の送付にあたって

戦後80年!
原水禁世界大会
福島大会開催!

７月２２日に、原水禁世界大会福島大会が福島市のパルセ飯坂で開催されました。全国各地から約６００名の参加があり、原発災害の現状を共有するとともに、今後の運動の方向性を確認することができました。

右は高校生平和大使によるシンポジウムです。若い力が反核・脱原発の運動をしていることに、心強さを感じることができました。

「福島大会」の実行委員長は、元福島県教組委員長の角田さんが務め、集会の中でもあいさつを行いました。

この「福島大会」は、８月４日～６日の「広島大会」、７日～９日の「長崎大会」へと続くものです。「広島大会」の期間中に行なわれた平和記念式典では、子ども代表の発言がありました。「全文」を別紙でお届けします。

****

日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）が昨年ノーベル平和賞を受賞しました。被団協は、日本の「核兵器禁止条約」への参加を要望していますが、オブザーバー参加すらしていません。アメリカによるイランの核施設攻撃の時もそうでしたが、唯一の「戦争被爆国」として反核の意見を堂々と表明してほしいと思う人は多いのではないでしょうか。

新入会員の紹介

矢内　賢太郎さん（前楢葉町教育長。楢葉中学校長で定年退職。）

当会員の中にも「福島県退職公務員連盟」に所属している方がいらっしゃいますが、矢内さんは、その双葉支部の事務局長を担っていらっしゃいます。当会の趣旨に賛同され、このたび入会していただきました。

脳トレ＆筋トレのすすめ

新聞や雑誌等で「脳トレ」「筋トレ」の記事が掲載されています。２つを組み合わせて行うことにより、認知症防止につながることも確認されているそうです。たとえば・・・

「野菜」や「動物」や「花」などの名前を唱えながら歩く。（テーマは自由に）

階段を昇ったり降りたりしながら、たとえば 100 から７ずつ引いていく。

「筋トレ」の中でも一般的な「スクワット」については、無理なくできるトレーニングも紹介されていました。

椅子に座ったり、立ち上がったりするもので、それを「ゆっくり」行うとより効果的だそうです。ぜひお試しを。

原稿をお待ちしています

近況報告、または昔の思い出、さらには現職時代の写真など、提供をよろしくお願いします。短歌や俳句なども大歓迎です。メモ的なものでもどうぞ。

○　住所等の変更及び会報の原稿は、下記の連絡先までお願いいたします。

○　連絡先　　（事務局長）柴口正武　宅

〒９７６－００３６　相馬市馬場野字寺内１７５－５

※　電話は　　０９０－２６０４－８９４１

※　ファックスは　　０２４－５２２－７７５１

（弘済会福島支部／柴口勤務先）

※　電子メールは　　shibaguchi0211@gmail.com

平和記念式典で地元の小学生が述べた「平和への誓い」の全文です。

平和への誓い

いつかはおとずれる、被爆者のいない世界。
同じ過ちを繰り返さないために、多くの人が事実を知る必要があります。

原子爆弾が投下されたあの日のことを、思い浮かべたことはありますか。
昭和２０年（１９４５年）８月６日　午前８時１５分。
この広島に人類初の原子爆弾が投下され、一瞬にして当たり前の日常が消えました。
誰なのか分からないくらい皮膚がただれた人々。
涙とともに止まらない、絶望の声。
一発の原子爆弾は、多くの命を奪い、人々の人生を変えたのです。

被爆から８０年が経つ今、本当は辛くて、思い出したくない記憶を伝えてくださる被爆者の方々から、直接話を聞く機会は少なくなっています。
どんなに時が流れても、あの悲劇を風化させず、記録として被爆者の声を次の世代へ語り継いでいく使命が、私たちにはあります。

世界では、今もどこかで戦争が起きています。
大切な人を失い、生きることに絶望している人々がたくさんいます。

その事実を自分のこととして考え、平和について関心をもつこと。
多様性を認め、相手のことを理解しようとすること。
一人一人が相手の考えに寄り添い、思いやりの心で話し合うことができれば、傷つき、悲しい思いをする人がいなくなるはずです。
周りの人たちのために、ほんの少し行動することが、いずれ世界の平和につながるのではないでしょうか。

One　voice.

たとえ一つの声でも、学んだ事実に思いを込めて伝えれば、変化をもたらすことができるはずです。

大人だけでなく、こどもである私たちも平和のために行動することができます。

あの日の出来事を、ヒロシマの歴史を、二度と繰り返さないために、私たちが、被爆者の方々の思いを語り継ぎ、一人一人の声を紡ぎながら、平和を創り上げていきます。

令和7年（2025年）8月6日
こども代表
広島市立皆実小学校6年　関口千恵璃
広島市立祇園小学校6年　佐々木駿

原爆ドームは「世界遺産」として登録されました。これからも保存されていきます。とても意義あるものです。

しかし、東京電力第一原発事故によって「地域」「コミュニティ」が崩壊した私たちのふるさとは保存されることなく、「復旧・復興」の名のもとに、逆に「消し去られる」または「なかったこと」にさせられようとしています。

広島・長崎の思いを共有しながらも、福島の「特異性」をずっと継承してくことが大事です。

双葉支部

２０２５年　９月　１日　　第４１７号

退教協ニュース

第一章　憧れ

いわき市（大熊町）髙野正美

（事務局より）前回の髙野さんの原稿は「序章」でした。いよいよ「本編」ですが、前の久保田さんの原稿のように、シリーズ的にお送りいたします。

小学校の頃から野球が大好きだった。１年生の頃、隣の家の河村建設の５つ上のお兄ちゃんのツトム君にキャッチボールを教えてもらい、２年生の頃には６年生の野球の試合に混ぜてもらっていた。

５年生になると、毎週日曜日に双葉南小学校の校庭や近くの公園、稲刈り後の田んぼなどに同級生を集め、野球の試合をしていた。６年生と試合をしたこともたびたびあった。

小学校の帰り道には双葉高校があり、友達とよく硬式野球部の練習を見学していた。

真っ黒に日焼けし、土塗(まみ)れ、汗塗(まみ)れの無精髭を生やしたオヤジのような高校生の練習を、野球部のグラウンドとテニスコートの間に植えてあった背の低い木の枝に板を張った特製秘密基地に陣取って見るのが楽しみだった。

ある時、側溝に落ちていた硬式野球ボールを拾い、家に持ち帰った。こんな固いボールの中身がどうなっているんだろうという興味が沸き、表面の朱色の糸を切り、皮を剥いでみた。すると、固い皮の下には少し太い毛糸のような糸がへばりつくようにぐるぐる巻きになっていた。その糸を引っ張って解いていったが、なかなか終わらない。何十メートルも糸を解いていくと、やっと終わりが来た。すると、丸いゴムボールのような小さな玉が出てきた。触るとフニャフニャしている。先の尖った棒で突いてみたら、ゴムの中から青っぽい液体が出て

きた。一つの達成感のような思いが沸き、嬉しかった。

それにしても、何でこんなゴムと糸に巻かれているだけのボールが、あんなカチコチの固い硬式野球ボールになるのかが不思議でならなかった。

自分なりに考えたのは、よく手にしていた軟式野球ボールでさえ、ただのゴムでできているのに、体に当たるととても痛い。ましてや隙間なく糸がぐるぐる何十メートルも巻いてあって、その表面を丈夫な皮で覆っているんだから、硬くなるのも当たり前か、なんて勝手に納得していた。

こんな野球に興味津々の少年だから、当然中学校に入学し、部活動の見学期間を終えるとすぐに、野球部に入った。

他に、双葉南小学校からは、川見、佐藤、森川、天野、照井も入部した。

入部して驚いたことは、小学校から知っていた１つ上２つ上の先輩たちが、見違えるほど大きくなっていたことだ。

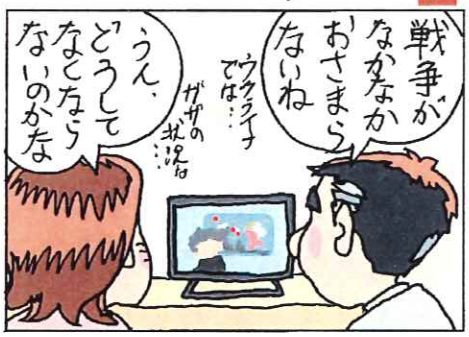
入部当時、１４０センチちょっとしか身長がなかった俺には、１６０センチ、１７０センチ以上もある先輩たちが、大人のように見えた。

いくら自分が、小学校時代は、チームの中心的存在だったとは言え、中学生の練習風景を見ていると、その実力の差は月とスッポンだった。

１年生は毎日毎日球拾い。外野の後ろやファールグラウンドに飛んだ球を拾うだけだった

平和を願って

by Monster 松



が、その球を拾うこと、球に触れることが楽しみの１つだった。

そんな１年生の目標は、自分が３年生になったらレギュラーになって活躍し、双葉郡で優勝し、県大会に出場することだった。

３年生の中体連も終わり、２年生が中心となって新人戦に向け練習に励んでいた夏休みの初めごろ、野球少年の考えを大きく左右することが起きた。

何と小学校時代、毎日のように寄り道をして見学していた双葉高校硬式野球部が、夏の県大会決勝に進出したのだ。優勝すれば甲子園に出場できるのだという。

「決勝を見に行きたい」

両親にお願いし、双葉町で準備してくれる応援バスで、郡山市の開成山球場で行われる、対学法石川高校との決勝戦の応援に行けることになった。

中通り地方にある郡山市は盆地のせいか、浜通りにある双葉町とは比べものにはならないほど蒸し暑かった。加えて球場内は風も入らず、暑さは増していた。

小学校の頃からテレビで見ていた甲子園に出場できるかもしれないと言うことで、母親に握ってもらった２つの大きなおにぎりを食べるのも忘れて、いっしょうけんめい応援した。

喉も枯れんばかりに応援した甲斐があってか、決勝点となる２点目をスクイズ（自分の記憶）で取った双葉高校が、学法石川高校の追撃を１点に抑え、２対１で勝利。念願の甲子園初出場を決めた。昭和４８年の夏は、最高の夏だった。

あとで分かったことだが、相手の学法石川高校のエースは、後にプロ野球、大洋ホエールズのエースとして活躍した遠藤選手であったことが分かり、よく勝てたものだと思った。

確かに、球がものすごく速くて、双葉高のチャンスがあまりなく、打ちあぐんでいたのだ。

祝賀パレードを兼ねた帰りのバスの中は喜びで大賑わい。国道２８８号を通って、都路村

を通る時には、暗くなりかけていたものの、たくさんの人が出迎えくれた。

心はもう決まった。絶対に双葉高校の硬式野球部に入るんだと、１３才の決意を固めた。

今は球拾いでも、これからいっしょうけんめいに練習に励み、うまくなって、そして双葉高校野球部に入部することを夢見て、毎日の練習に取り組んでいった。

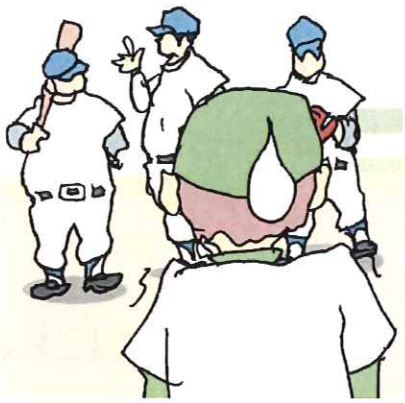
しかし、中学２年生、３年生になるに従って、ある悩みが膨らんできた。体力の問題だ。自分の身長は、中学３年生にて中くらいの１６０センチそこそこ。それに比べ、チームメイトはぐんぐん大きくなり、エースの橋本は１７０センチ超。１つ年上でエースだった安井さんは１８０センチ超で、ひと足早く双葉高校硬式野球部に入部していた。

自分は、少し足が速いと言うだけで、ホームランのような長打を打てるような強打者ではない。ただのいち中学校野球部員に過ぎない。中学野球での通算打率だって２割５分そこそこ。だれがどう考えても、双高硬式野球部で活躍できるとは思っていないだろう。

そんな考えを一変させる出来事があった。それは、中学３年生の中体連の時だった。初戦の相手は、優勝候補の浪江中学校だった。

２年生の新人戦では、同じ浪江中学校の４番鈴木のホームランで０対１で負けている。浪江中学校は大きい人ばかりで、整列した時には、新人戦の時よりも一段と双葉中との身長差が開いたような気がする。

双葉中の平均身長が１６５センチぐらいとして、浪江中はほとんどが１７０センチを超えていて、サードの伊藤などは１８０センチを超えている。



加えて、エースの布野は２年生の中体連の時から投げており、新人戦の時より一段と球が速くなっている。

自信に満ち溢れた投球をしている。（つづく）

（事務局より）次号は、久保田さんの原稿をお送りします。